日刊 動労千葉
79.4.14
No.89
国鉄動力車労働組合
千葉地方本部
千葉市要町二-一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四三(22)七二〇七

労農連帯を一層強め、三里塚・ジェット闘争を貫徹しよう！

4・11-12集団テロ・リンチを糾弾する！

当局・権力に泣きつく反動分子の振り上げを許せ！

4・12動労青年部を僭称する革マル分子に引きまわされた暴力的襲撃は成田、勝浦、館山、新小岩で毅然たる動労千葉組合員の対応によって粉砕された。四月十三日早朝においても、館山市内でニコポン→デマ宣伝→脅迫をもってする家庭への介入を図ろうとした関乗議長・吉成（東京地本）と全乗常任委員・野溝（東京地本）の二人が捕捉され館山支部組合員の怒りに燃えた追及を受けている。　4・11錦糸町駅ホームにおける弁護士、革マル学生をも投入し、駅当局に対して「列車が止っても動労本部が責任を持つ」なる労使協調路線を丸出しにしての集団テロ・リンチも含めた、動労本部の名をもってするこの暴力団も顔まけの一部反動分子の組織破壊攻撃は、これが労働組合なのかという一四〇〇名組合員の憤激によって完全に粉砕され、動労千葉の団結はさらに一層うち固められている。

「動労本部」の孤立と焦りの体現＝セクト的暴力、全労働者・人民に知れわたる「闘う動労千葉」

動労本部の孤立は青木書記長・城石組織部長を先頭に、総評、県労連、国鉄当局に対し、どう喝、脅迫、哀願も含めて圧力をかけたにもかかわらず、4・11総評青年協集会に動労千葉青年部の参加がはっきりと承認されたという事実によって何よりも鮮明に示されている。

動労千葉の闘う正義は総評も含め、闘う労働者・人民によってはっきりと認められているのだ。

動労中央の名をもって、誤まれる機関決定をゴリ押ししようとしても、そんなことが受け入れられるはずもないことを、革マル分子に引きまわされている動労中央は今こそ銘記すべきである。

動労内においてさえ、暴力によるどう喝がなければ機関決定が定着しないという現実を見るならば、理不尽な横車が、他単産や総評に受け入れられるはずもないことは当然ではないか。

この現実に直面し、焦り、動揺した革マルのセクトとしての危機感を体現するものとして、4・11錦糸町ホームにおける動労青年部の名をもってする集団テロ・リンチ、4・12の成田、勝浦、館山、新小岩各支部における暴力、庁舎の破壊行為が発生しているのだ。

勤務中の乗務員に暴力
―「オルグ」の実態―

4・12の革マル分子による暴力は両国駅において到着列車の乗務員＝勤務中の動労千葉組合員を集団で追いかけまわすという所までエスカレートしている。武操等でも、乗り入れ乗務員に対する二時間もの「どう喝」が行われている。

この暴挙を停止せよとの当然の説得に対し、「東京地本の組合員が勤務中に津田沼で暴力を受けた」などと泣き面で大騒ぎし「身の危険を感じる」と称して、四月十三日から中野電車区乗務員の総武線への乗務拒否の挙に出てきている。

何とあさはかで甘ったれた対応ではないか。

たかだか十数名の組合員しかいない中野電車区支部だから当局が代替乗務ができるという状況の中で、当局に圧力をかけ、哀願し、動労千葉への弾圧を当局に強要しようとするような小手先芸で、動労千葉が屈服すると思うなら何日でも乗務拒否を続けて見ればよい。

津田沼支部をはじめとする動労千葉全組合員は怒りに燃えている。

これが「組織に責任を持つ」と称する反動分子の当局の手を借りることもいとわない動労千葉破壊策動の実態なのだ。

甘ったれるな反動分子！

しかし、反動分子は銘記すべきである。

津田沼支部組合員が決意して同じことをやったら、首都圏の国電が完全にマヒするという現実からは反動分子といえども逃れることはできないのだ。

われわれは、反動分子のような甘ったれではなく、断乎闘い抜く決意をこめて、労働者・人民に、そして何よりも組織に責任を持つが故に、動労本部の名をもってする暴挙と理不尽に耐え、労働組合として、労働運動の矜持を貫くものとして正しいことをあくまで主張して闘う姿勢を堅持してきた。動労千葉の闘いはセクト的小手先芸をもって当局に泣きつく幹部請負い式の反動分子の闘いとは違うのだ。

われわれが一四〇〇名労働者の労働者魂に燃えた怒りをとき放ち、飛躍をかけて決起するとき、自らの4・11～12の暴力の実態を隠蔽するための反動・革マル分子の小手先芸などはあとかたもなく吹っ飛ぶのだということを、われわれははっきりと宣言する。

『団結署名』を全員貫徹しよう！

職場・家庭への撹乱＝介入粉砕！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！